

ダニエル・デフォー

『ペストの記憶』（16）

訳 武田将明
Takeda Masaaki

かしいまや病魔の猛威はすさまじく、市場でさえ、食料の品揃えも買い物客の賑わいも、以前に比べるとめっきり乏しくなってしまった。すると市街地の首長の命令で、食料を運んでくる地方の人びとはロンドンに入る手前の道端で足止めされ、そこに品物を広げることになった。彼らはその場で売り買いを行うと、すぐに立ち去るのだった。この方針によって地方の人たちは積極的に食料を運ぶようになった。いまや食料をロンドンへの入口あたりで売ってもいいし、野原で売ってもよくなったのだから。なかでも市街地の東側、ホワイトチャペル通りの先の野原やスピトルフィールズは栄えていた。（注：今日スピトルフィールズと呼ばれる商店街は、当時は文字どおり広い野原だった。他には南側のサザークにあるセント・ジョージ・フィールズや、北側のバンヒル・フィールズ、イズリントンの近くのウッズ・クロースと呼ばれる広大な野原もそうだった。）こういった場所に市街地の首長、市会議員、治安判事は部下や奉公

人を使いに出し、家族のために買い物させ、みずからはなるたけ家から出ないようにしていた。他にも多くの人たちがこれに倣った。この方針がとられてから、地方の人たちは心置きなく上京するようになり、あらゆる食料をもってきてくれたが、ほとんど被害をこうむることはなかった。地方の商人が奇蹟的に病気にならなかったという当時の噂には、こうした原因もあったのだろう。

つつましいわが家はというと、さっき話したようにパン、バター、チーズ、ビールを蓄えたので、医師の友人の助言を受け容れて、ぼく自身と家の者を外に出さず、命を危険にさらして肉を買うくらいなら数ヶ月肉なしですごす辛さに耐えようと決意した。

家の者を外出させなかつたくせに、ぼくは飽くなき好奇心を押さえつけ、ずっと孤独に閉じこもるなんてできなかった。たいていは恐怖に怯えて帰宅することになるのだが、それでもぼくは懲りなかった。さすがに、はじめほど頻繁には出なくなつたけれども。

ちょっとした用事がないわけじゃなかった。それはコールマン街の教区にある兄の店に行くことで、留守中の様子を見るよう頼まれていたんだ。当初は毎日行っていたが、やがて週に一度か二度になった。

こうして歩いていると、たくさんの陰惨な場面を目撃した。とくに多かったのは、路上で倒れたまま死ぬ人びとや、女たちの悲痛な泣き声と金切り声だった。女たちは苦痛のあまり部屋の窓を開け放ち、啞然とするほど悲惨な叫びをあげるのだった。こういう哀れな人びとが感情に駆られて取った様々な身振りは、とても描き出せるものじゃない。

市街地にあるロスベリ通りの^{トークン・ハウス・ヤード}鑄造所前をすぎようとしたとき、いきなり窓が乱暴に開け放たれ、女の人が三度おぞましい金切り声をあげてから、こう叫んだ。「ああ、死ぬ、死ぬ、死ぬ！」およそ真似のできない声だった。ぼくは恐怖に打たれ、まさに血が凍るのを感じた。通りのどこにも人影は見られなかったし、他に開いた窓もなかった。もはや人びとはなにがあっても関心をもたなかったし、助け合う余裕もなくしていた。だからぼくも素通りしてベル小路に入った。

ベル小路に入ったとたん、通りの右側からさっきよりひどい悲鳴があがった。これは窓から外に発せられたものではなかったけれど、家じゅうが恐怖に震え、女や子供たちが気の狂ったように叫びながら部屋から部屋を走りまわる音が聞こえた。屋根裏部屋の窓が開いていたのだ。すると小路の向かいの窓から誰かが呼びかけて、「なにがあつたんだ？」と訊ねた。これに対し、もう一つの窓から返事があつた。「ああ、わが家のご主人が首を吊ってしまったのです！」相手はふたたび訊ねた。「ご主人の息はないのか？」もう一方が答えた。「ええ、ええ、息をしません。すっかり冷たくなっています！」死んだ人は商人で、地区の助役で大金持ちだった。名前も知っているけれど、実名を出すのは控えておきたい。ともあれこの家には辛い時だったろうが、いまではふたたび繁栄している。

しかしこれは一例にすぎない。日々どれだけおぞましいことが各地の家々で起きていたか、とうてい信じることができない。病魔に苛まれ、腫れ物に苦しめられる人びと。それは本当に耐えがたく、ついに自分自身を制御できなくなつて叫び狂い、凶暴な手でみずからを害するのもしばしばだった。窓から身を投げたり、銃で自分を撃つたりしたんだ。錯乱した母親は

おのれの子を殺害した。ある者は悲しみの感情に押し潰されて死に、またある者は恐怖と衝撃だけで死んだ。少しも感染していなかったのに。怖さのあまり呆然として、そのまま愚鈍な狂気に陥る者もいれば、絶望から錯乱する者もいた。憂鬱から狂気へと沈んでいく者もいた。

腫れ物の痛みはとりわけ強烈で、耐えられない人もいた。内科医と外科医は数多くの哀れな病人に拷問まがいの治療をして、死なせることさえあった。腫れ物が硬くなる人がいたが、これに対して医者は膿を吸い出す強力な絆創膏というか湿布を貼り、腫れ物を潰そうとした。これが通用しなければ、医者は腫れ物を容赦なく切り刻んだ。時に、ますます硬くなってしまったが、それは病気の影響もあったけれど、膿をあまりに強引に吸い出したせいもあった。どんな器具でも切開できないほど硬くなると、今度は腐食性の薬品で腫れ物を焼いた。このため多くの人が苦痛にわめき狂いながら死んだ。こうして悶え苦しみながらも、ベッドからでないよう注意を払う人さえいない患者のなかには、いま話したように自分の命に手をかける者もいた。他には通りに抜け出して、たぶん素っ裸で、監視人など役人に制止されなければそのまま川に走っていき、流れを見つけたら辺り構わず飛びこむ人もいたんだ。

このような拷問を受ける人たちのうめき声や叫び声に、まさに心の奥まで貫かれることもしばしばだった。ただしこの病気の現れ方には二通りあって、いま述べたのははるかに治癒の見こみのある症状だった。こうした腫れ物が膿となり、つぶれて流れてしまえば、つまり医者が言うには腫れ物を解^{ダイジェスト}消してしまえば、たいていの患者は快復した。他方で、あの高貴な夫人の一人娘みたいに、はじめから死に攻めたてられ、致命的な

^{しるし}徴が肌に現れてしまった人たちは、ついさっきまで普段どおり暢気にその辺を歩いていたのに亡くなることが多く、あるいは卒中か癲癇の発作のように、一瞬でバツタリと斃れてしまうことも珍しくなかった。こうした人は急にひどい不調を覚え、ベンチや露店の台など、そこにあるなにか適当な場所にすばやく足を運ぶか、可能ならば家まで急ぎ、前にお話ししたとおりでだけれど、腰を下ろすと意識が遠のき、死んでしまった。こちらの死に方は、通常の壊疽を起こした人の場合とほぼおなじだった。気を失ったまま死ぬ、いわば夢みながらこの世を去るのだった。こんなふうになくなる人たちは、自分が感染したことさえまったく気づきもしないうちに、壊疽が全身に広がってしまったんだ。医者までも、この人たちの胸や他の部位を開くまでは、その病状を正確に知ることはできなかった。

このころ、瀕死の人たちの面倒を見ている看護人や監視人について、実に多くのおぞましいうわさ話を聞かされた。すなわち、感染者の看病をするために雇われた看護人が、患者を乱暴に扱い、食べ物を与えなかったり窒息させたりという悪辣な手段を用いて死期を早めている、要するに患者を殺害しているというんだ。さらには、閉鎖された家を見張るべく置かれた監視人が、生存者がひとりだけになると、そしてたぶん、この人も病に伏していたのだろうけれど、それを見計らって家に押し入り、この生き残りを殺害して即座に死体運搬車に投げこんだという話まであった。墓場に着いた遺体はまだ少しも冷たくなっていなかったそうだ。

こういう殺人が何度か犯されたことは、認めないわけにいかない。たしかこの罪で二人が拘置所に送られたが、裁判の始まる前に死んでいたと思う。そして他に三人、この手の殺人の罪

に何度か問われたが赦されたと聞いている。とはいえ、後に一部の人が言いふらしたように、この犯罪がどこでも行われていたとは、まったく信じることはできないのだ。だいたいそんな行為は理屈に合わないだろう。患者はもう快復の見こみがほとんどなく、自分ではなにもできないほど惨めな境遇に置かれていて、しかも殺人を^{そそのか}唆す条件などなかった。いや少なくとも、この患者は間もなく死に、生きようとしても無駄だと犯人が知っていたという事実より強い動機など、存在しなかったのだから。

このおぞましい時代でさえ、盗みなどの悪事がさんざんなされていたのを否定するつもりはない。一部の者は欲の力に押し流され、盗み奪うためならどんな危険をもいとわず、なかでも家族というか住人がすべて亡くなった家には万難を排して押し入り、感染の危険を顧みず、死者の身体から衣服さえ剥ぎとり、またベッドに寝ながら死んだ人たちからは寝具も奪った。

きつとこういうことが、ハウズディッチのある一家に起きたのに違いない。そこには一人の男と娘がいたが、残りの家族はすでに死体運搬車が運び去っていたんだらう。この二人が、ある部屋に一人、また別の部屋に一人、全裸で床の上に死んでいるところを見つけた。どうやら二人は盗人によってベッドから床に転がされたようで、寝具が盗まれ、すっかり消え失せていた。

ここで話しておくべきは、この災害のあいだじゅう、女たちの方が分別も怖れも慎みもかなぐり捨てていたことだ。看護人の肩書きで病人の面倒をみる女性は膨大な数にのぼったので、彼女たちが雇い主の家でケチな盗みを働くことなどしょっちゅうあった。なかには公衆の前で鞭打たれる者もいたけれど、た

ぶんこの女たちは見せしめに首を吊られた方がよかったらう。だって、こういう理由で盗難に遭う家が相次いだので、とうとう教区の役人が派遣され、病人に看護人を紹介し、どの看護人を送ったか記録を取るようになったのだ。担当先の家で被害が出たときに釈明を求めるための措置だった。

もっともこうした窃盗が及んだのは主に衣類、リンネル、および看病した人が死んだときにくすねた指輪やカネなどで、家じゅうで略奪を働くにはいたらなかった。こういう看護人のひとりについてお話しすると、年月が過ぎて死の床につきながら、心の底から畏れを抱いたこの女は、看護人をしていたころ犯した盗みを告白したんだ。この盗みで女は格段に裕福になったらしい。だけど殺人については、さっき示したのを除けば、うわさに聞こえるような習わしが実在した証拠は、これまで一度もあがっていないようだ。

(東京大学准教授)